

実験 3

避難生活を体験してみよう

実験の概要

体育館(あるいは教室)で、避難生活を体験します。

実験のねらい

避難生活では、普通の生活と同様に快適に過ごせるわけではありません。本実験では、体育館あるいは教室にごさを敷いて、非常食を食べてみたり、寝転んだりして、避難生活を疑似体験し、その大変さを理解していただきたいと思います。

実験の前に

避難生活を想像してみましよう。集団生活です。家の中のように便利なものばかりがあるわけではありません。テレビもゲームも大好きなジュースもありません。仲の良い友だちと遊ぶことも電話で話すこともできません。もししたら家族と離れ離れになってしまっているかもしれません。そのような不安の中でも健康を保ちながら生活をしていかなければなりません。

先にこのような状況をイメージし、実験をはじめてください。

用意するもの

ごさ、非常食(カンパンが適していると思います)、飲料水、水災害の写真や映像(入手先については、「実験に際してのポイント」を参照ください)

実験の準備

体育館(あるいは教室)にごさを敷きます。

クラスをいくつかのグループに分けておこなうと良いでしょう。

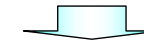


実験の手順

1. 体育館(あるいは教室)にごさを敷きます。

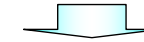


2. 非常食、飲料水を用意します。

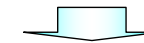


3. ごさの上に座ったり寝転んだりしながら、水災害にあったことを想像します。

…水災害の写真や映像を見てみると良いでしょう。



4. 非常食を食べ、水を飲んでみます(昼食時に実施してもよい)。



5. 何がたいへんだったか、想像していたのと同じだったか違っていたかなどを話し合う。

期待される成果

○避難生活が大変であることを実感します。

発展学習：体育館あるいは教室での擬似避難生活を一泊で行うと、より大変さを理解できます。

実験に際してのポイント

普段どおりと感じないよう、水災害の写真や映像を見て、外の被災状況を想像できるよう工夫しましょう。水災害の写真や映像は、北海道開発局の水防災学習用資料の『水防災教育マニュアル』に“資料の閲覧などに関する情報”としていろいろな組織のウェブサイトが記載されていますので、それらから入手できます。

実際の避難所生活には不便なことがたくさんあります。例えば、集団生活である、家族以外のさまざまな人がいる、プライバシーがない、夜なかなか眠れずほかの人の動きやいびきがうるさく感じる、一人当たりのスペースが狭い、好きなものを好きなときに食べることができない、いつも見ているテレビ番組を見ることができない、友だちと遊びにくい、お風呂やトイレが混雑していることがある、、、などです。

実際には、自治体によって異なりますが、一人当たりスペースの基準については、

- ・2m²以上(長期化する場合は3m²以上)
- ・1,000m²/600人=約1.67m²/人
- ・最低1.65m²

という記載が避難所運営マニュアル等に記されています。たたみ一畳で約1.6m²ですから、一人当たり一畳分程度しかのスペースがないこととなります。

また、避難生活によって疲労やストレスが蓄積し、体調を崩す場合もあります。

避難生活は、実際に経験しないと本当にどの程度不便なのか、息苦しいのか、大変さが分かりませんが、少しでも考えていただく機会になれば良いと思います。